

病院建築の変遷に関する研究

—新聞にみる医療に対する人々の要請について(2)—

横 山 勉 ・ 中 岡 義 介

A Study on Developing Process of Hospital Architecture

—From view point of the people's request
of medical treatment in newspapers (2)—

Tsutomu YOKOYAMA, Yoshisuke NAKAOKA

In Taisho era, A sanitary knowledge was diffused among the people and medical treatment have spread and have interest in medical treatment. Hospital was difficult of access before, felt to be familiar, A woman activity exerts a serious influence upon medical treatment and have revolutionized medical treatment and hospital architecture.

はじめに

病院建築は、医療技術や医療機器の発展につれて増改築を繰り返し、また病院建築を新たに計画する場合には、それらに備えるべく、あらかじめ増改築を予測して建築される。そのため医療技術や医療機器が病院建築を規定するようになり、病院建築のあり方が分かりにくい現状にある。

そこで、病院建築がどのように変化してきたかをたどり、病院建築のあり方がどこにあったかを明らかにすることは、今日、きわめて重要なことのように思われる。

病院建築のあり方を一方で支えているのは、人々の医療に関する要請であり、病院建築のあり方の変遷をたどるうえで、人々の医療に対する要請を調べていくことは必要なことである。

病院建築に対する人々の要請を明らかにする方法はいくつかのものが考えられるが、そのひとつとして新聞や雑誌における記事を取り上げることが考えられる。新聞や雑誌は、性格上、その時代時代の医療に対する人々の要請のうちのやや話題性の高い記事が取り上げられる傾向が強く見られるが、病院建築に対する人々の要請を通時的に見ようとする場合には有効な方法のひとつと考えられる。

以上の観点から、本稿では、新聞を取り上げ、大正時代における医療に対する人々の要請を明らかにする。時代区分についてはさまざまな方法が考えられるが、ここでは、明治、大正、昭和という時代区分がかなりの程度のまとまった社会状況をもっているという考えにたって、明治、

大正、昭和という時代区分を用いることにする。

まず、新聞記事のまとめ方について述べ、それらの記事の出現回数を整理する。次に、その中から大正時代の医療に対する要請を特徴的にあらわしているにとらえられるいくつかの項目を取り上げて、要請の内容を分析する。そして、これらのことから、大正時代の病院建築のあり方を考察する。

1. 調査の方法と結果

1.1 調査の方法

方法として、新聞集録大正史全15巻（中島健蔵他監修 大正出版 昭和53年）を用い、その中の保健・衛生・医事の項の記事を項目ごとに整理する。項目は明治ニュース辞典全8巻（内川芳美、松島栄一監修 毎日コミュニケーションズ 昭和58年—61年）の見出し語を利用して、記事の内容に従って分類した。尚、明治ニュース辞典の見出し語の決定については、その凡例の中に次のように記している。「見出し語の決定に当っては記事の内容と言葉使いをなるべく生かす方

表1 項目別集計結果

大 正 項 目	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	計
伝染病・病気	5	5	11	5	19	3	21	15	9	4	7	1	16	18	10	149
衛生	1	3	1	4	8	6	1	2	4	3	3	4	3	1	3	47
出産	1			1	1		2	2	7	2	15	5	3	1	1	41
薬		4	4	10	2	1	1		1			3		2	1	29
病院・診療所		1	2	2	1	1	1	3	1		5	3	2	3	4	29
体格		1	2	3	6	5	2	3	2	1	1		1	1		28
医師			2	3	3			2		1	2	3		4	4	24
死亡率					4	3			2	3	2		1	1	2	18
療法	1				3	1				3	1	1	2	1		13
健康		1	1		3			2	1	1			3		1	13
人口			2	1	3	1				2	1			1	1	12
栄養						1		1	1		1	5	1	2		12
研究					3	1		1		3	1		1		1	11
医療機関					3				1		2	1	3			10
精神病				1	1		1		1		1	1	1	2		9
看護婦		1		2				1		1		1	1		1	8
健康保険											1	1	1		4	7
医師会					2		1		2			1	1			7
育児				1	1			2	1			1			1	7
医療器械				2						2		1				5
その他			2				1	2	4	3	2	1		1		16
計	8	16	27	35	63	23	31	36	37	29	45	33	40	38	34	495

向で考慮してありますが、一部、現代の言葉としてほとんど使われなくなっているものに関しては現代の言葉に置き換えました。」と。ここでは項目として、伝染病・病気、衛生、出産、薬、病院・診療所、体格、医師、死亡率、療法、健康、人口、栄養、研究、医療機関、精神病、看護婦、健康保険、医師会、育児、医療器械、その他に分類整理した。項目ごとに集計した結果が表1である。さらに次の章では各項目の内容を詳細に分析するために細項目を設けて、各項目を記事の内容ごとに分類整理していくことにする。

1. 2 項目別集計結果

表1をみていくと次のことがわかる。記事の総数は495である。項目別数量の多い順に区分けしてみると、第1グループの伝染病・病気が149で圧倒的に多く、第2グループの衛生47、出産41、第3グループの薬29、病院・診療所29、体格28、医師24、死亡率18と続き、以下第4グループの療法13、健康13、人口12、栄養12、研究11、医療機関10、精神病9、看護婦8、健康保険7、医師会7、育児7、医療器械5と続いていく。

年代別にみると、大正初期は他の年代と比べると記事数は少ない。反対に記事の多い順にみていくと、大正5年は記事数が63で他の年代と比べ非常に多く、項目の中では伝染病・病気19が多い。次に大正11年の記事数45で、項目の中では出産15が多い。次に大正13年の記事数40で、項目の中では伝染病・病気16が多い。以下はほぼ30台の記事数で続いている。

2. 調査結果の分析

2. 1 分析の方法

記事の数量が多い項目は、医療に対しての人々の要請が強くあらわれていることを示している。故に、表1より数量の多い項目を順序に伝染病・病気から死亡率までとりあげて分析していくことにする。尚、今回は一般病院を対象とするため、伝染病院（避病院）を語る要素としての伝染病・病気、伝染病院や精神病院や主に病院の種類をとりあげている病院・診療所、保健的内容の色彩の強い体格は除くことにする。また、記事の量は少ないが、病院建築に多大な影響を及ぼしている項目として、看護婦、医療器械は分析の対象とする。以上、分析の対象となる項目は、衛生、出産、薬、医師、死亡率、看護婦、医療器械の7つである。

2. 2. 1 医 師

医師に関する記事は計24とたいして多くないが、図1をみると、若干の年に記事が出ていないことがあるもののほぼまんべんなく、かつほぼ同じくらいの頻度で出ていることがわかる。ということは、医師のことは大正期を通じ、とくに大きな話題にこそならなかったが、ほぼ常時注目されていたことを示しているとみていいのではないか。

では、医師のどの側面が取上げられたか、図2をみると、女医、開業医、医学会がそれぞれ5、5、6とほぼ同数量取上げられていることがわかるが、その取上げられ方には時期的な差異がみ

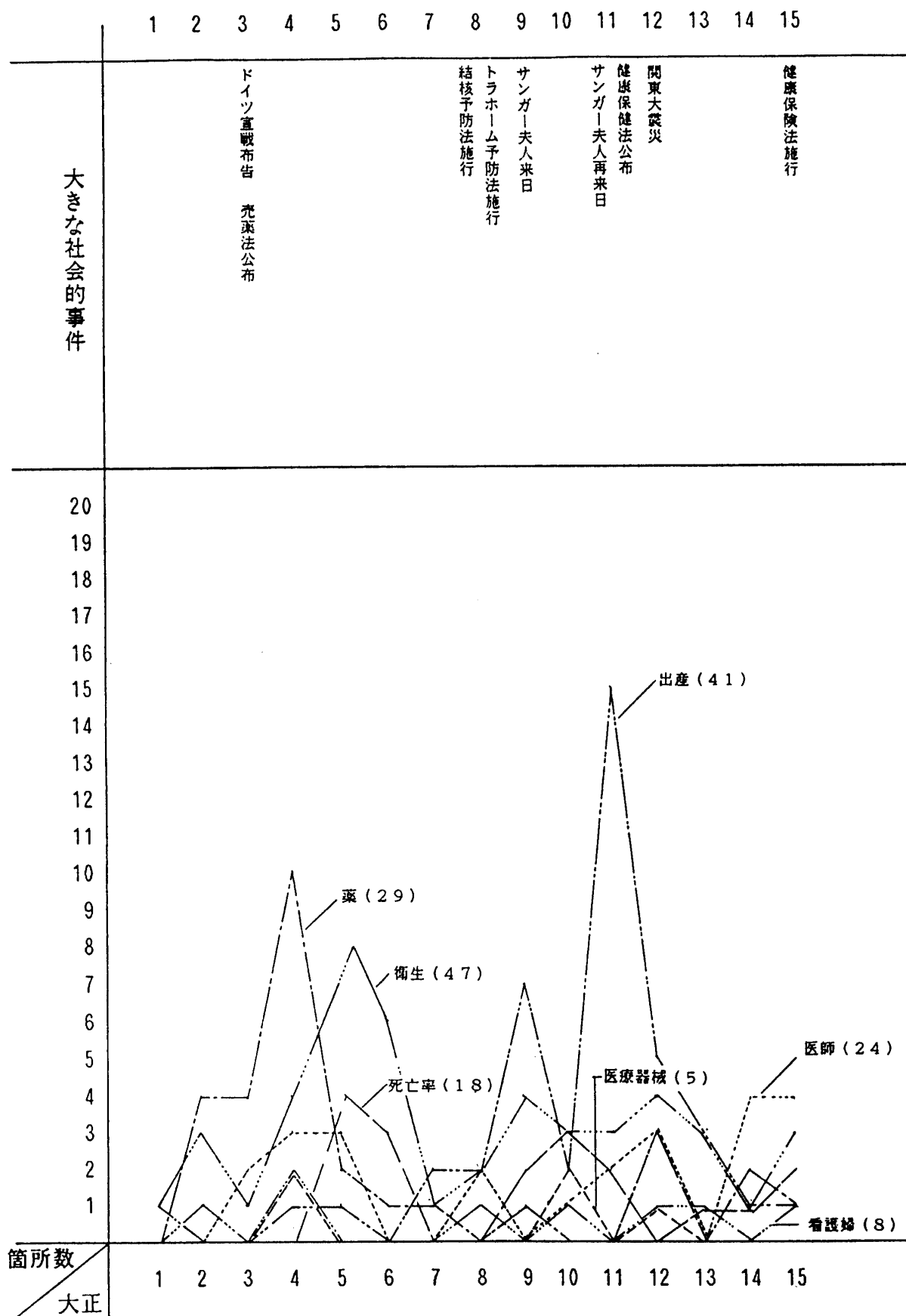


図1 項目分析

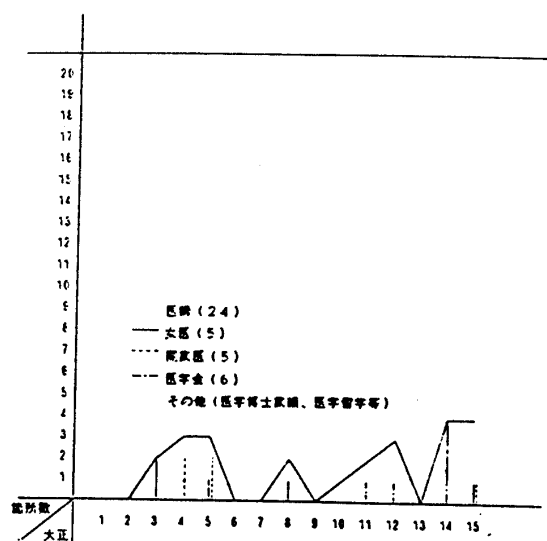


図2 細項目 (医師)

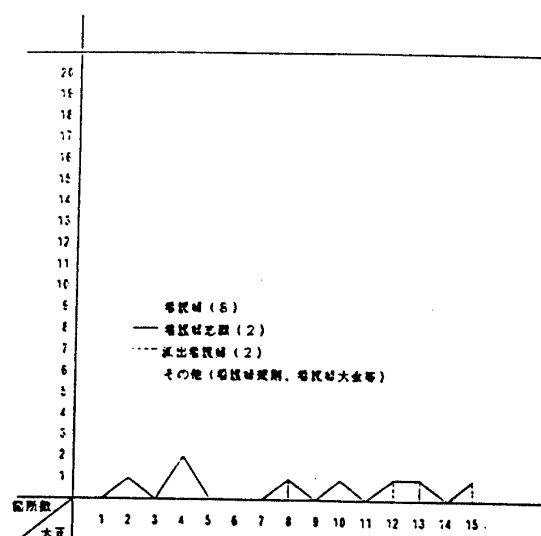


図3 細項目 (看護婦)

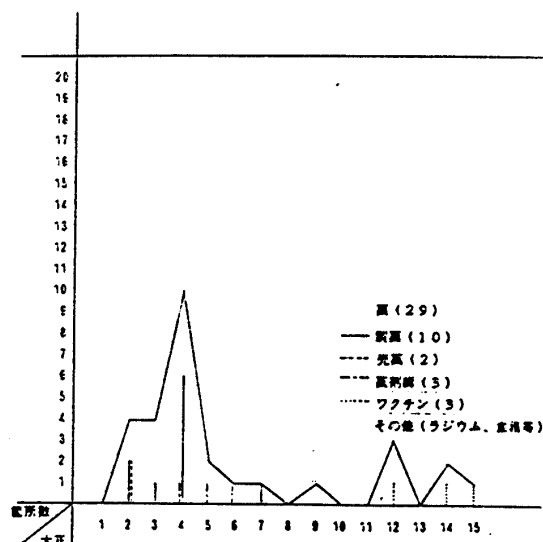


図4 細項目 (薬)

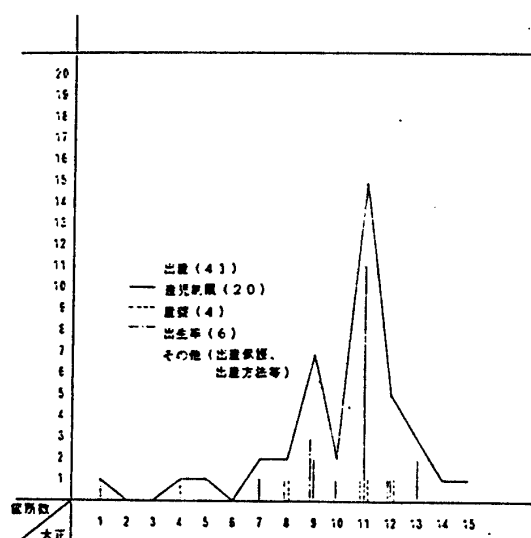


図5 細項目 (出産)

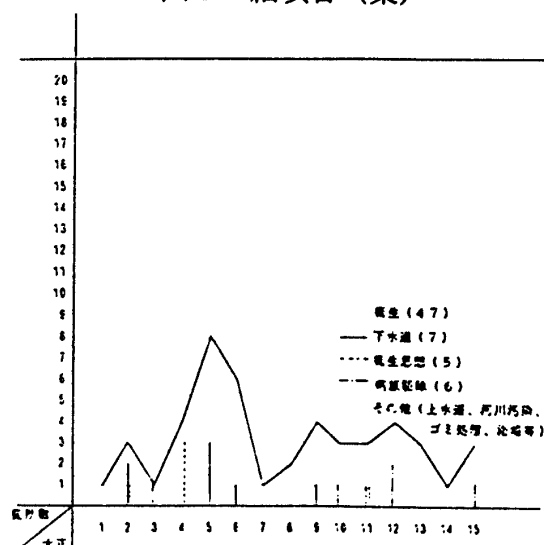


図6 細項目 (衛生)

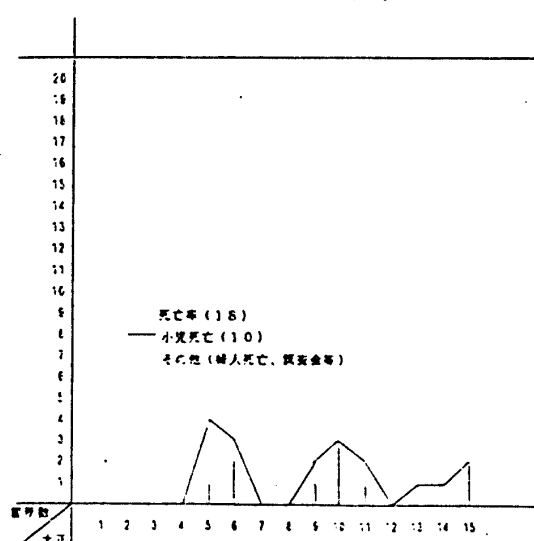


図7 細項目 (死亡率)

られる。すなわち、開業医は大正期の前期と後期に、また医学会は後期に集中して取上げられているのに対し、女医は前期、中期、後期と取上げられている。ということは、女医のことがたえず話題になっていたと考えられる。どのように女医のことが取上げられたか、それを記事の内容を見ることによってみていくと、

済生会の女医巡回医派遣の様子をみると、当時の慣習として婦女子が医師（男性）に診療を受けることを嫌ったことがわかる。（大正3年1月1日 中央）の記事より

女医の数は356名で男子と比べると十分の一にもみえないが、その数は増加傾向にあり、また内科と小児科の分野で女医の要望が高いことがわかる。（大正8年3月10日 読売）の記事より

2. 2. 2 看護婦

看護婦に関する記事は計8と多くないが、図1をみると、大正期の中期にとぎれているが、ほぼ隔年ごとにかつほぼ同じくらいの頻度で出てきていることがわかる。ということは、看護婦は大正期を通じ、とくに大きな話題にはならなかったが、注目され続けていたことを示しているのではないか。

では、看護婦のどの側面が取上げられたか図3をみると、看護婦志願、派出看護婦がそれぞれ2、2と同数取上げられていることがわかるが、その取上げられ方には時期的な差異がみられる。すなわち、看護婦志願は大正期の中期、後期に、派出看護婦は後期に集中的に取上げられている。ということは、派出看護婦は後期にとくに注目されたと考えられる。どのように派出看護婦が取上げられたか、それを記事の内容をみることによってみていくと、

大正期は派出看護婦が主流をなし、看護婦会は患者のみならず病院にも看護婦を派遣していた。大正期の後期になると派出看護婦の質が低下してきたことがわかる。また、看護婦の派出先での病気の伝染も問題になってきた。医療が人々に浸透しつつある大正期の後期には派出看護婦より病院看護婦へ移行する徴候がみえはじめたことがわかる。（大正12年4月22日 東日）（大正15年3月9日 時事）の記事より

2. 2. 3 薬

薬に関する記事は計29とたいして多くないが、図1をみると、若干の年に記事が出ていないことがあるもののほぼまんべんなく出て、また集中して出ている年もあることがわかる。ということは、薬の事は記事が集中して出てきた大正期の前期に大きな話題となり、その後もほぼ常時注目されていたことを示しているとみていいのではないか。

では、薬のどの側面が取上げられたか、図4をみると、製薬、売薬、薬剤師、ワクチンがそれぞれ10、2、3、3と製薬が多くあとはほぼ同数取上げられていることがわかるが、その取上げられ方には時期的な差異がみられる。すなわち、製薬、売薬、薬剤師はほぼ大正期の前期に、ワクチンは後期に、それぞれ集中的に取上げられている。ということは話題は大正前期にとくに注

目された製薬よりワクチンに移っていくのがわかる。すなわち、治療薬より予防薬に移りつつあると考えられる。どのように製薬のことが取上げられたか、それを記事の内容をみることによってみていくと、

ドイツの宣戦布告でドイツの医薬品の輸入が止まり、ドイツ医学に範をとった日本は打撃を受けた。そのため医薬品供給の変革をせまられ、国内の医薬品の製造に力をいれることとなる。そのことが日本医療の発展によい結果をもたらしたことがわかる。(大正4年6月16日 読売)の記事より

2.2.4 出 産

出産に関する記事は41とかなり多いが、図1をみると、大正期の前期に記事がとぎれたり、また数回集中的に多くなることはあるが、ほぼまんべんなく出ていることがわかる。ということは、出産のことは大正期を通じ数回大きな話題となり、ほぼ常時注目されていたことを示しているともていいのではないか。

では、出産のどの側面が取上げられたか、図5をみると、産児制限、産婆、出生率がそれぞれ20、4、6と産児制限は圧倒的に多いが、他はほぼ同数であることがわかる。すなわち、出生率は中期・後期に取上げられているのに対して、産児制限は大正期の後期に集中的に多く、産婆同様に前期、中期、後期と取上げられている。ということは、産児制限、産婆はたえず話題になっていたと考えられる。どのように産児制限と産婆が取上げられたか、それを記事の内容をみることによってみていくと、

サンガー女史の来日で産児制限の話題が急上昇している。人々の生活上の問題として産児制限に関心を寄せていたことがわかる。(大正10年11月20日 萬)(大正11年2月6日 読売)の記事より

産婆は大正期を通じ増加の一途をたどっていることがわかる。そのことから、人々は病院出産ではなく、多くは自宅出産であったことが考えられる。産婆の増加にともない社会的地位は高まっていったが、反対に質的低下をまねく傾向も垣間見られることがわかる。(大正4年4月30日 報知)(大正8年3月7日 読売)の記事より

2.2.5 医療器械

医療器械に関する記事は計5と少ないが、図1をみると、大正期の前期、後期にはほぼ集中し、かつほぼ同数くらい出てくることがわかる。ということは、医療器械はとくに大きな話題にはならなかったが、ある時期に限り注目されたともていいのではないか。どのように医療器械のことが取上げられたか、それを記事の内容をみることによってみていくと、

医薬品同様、ドイツからの医療器械はストップしたため国内で製造するほかはなかった。国内製造の奨励で安くて良い製品をつくり出すことができるようになった。診療に医療器械が普及していくことがわかる。(大正4年6月23日 東日)の記事より

2. 2. 6 衛 生

衛生に関する記事は計47と多く、図1をみると、記事の掲載頻度には差異はあるが、まんべんなく出ていることがわかる。ということは衛生のことは大正期を通じ、大きな話題となり常時注目されていたことを示しているとみていいのではないか。

では、衛生のどの側面が取上げられたか、図1をみると、下水道、衛生思想、病原駆除がそれぞれ7、5、6とほぼ同数取上げられていることがわかるが、その取上げられ方には時期的な差異がみられる。すなわち、下水道、衛生思想は大正期前半に集中しかつ前半と後半に、病原駆除は大正期後半に集中しかつ前半と後半に出てきている。ということは、下水道、衛生思想、病原駆除は三位一体の関係で、とくに下水道、衛生思想は表裏一体であると考えられる。それぞれの関係を記事の内容をみることによってみていくと、

下水道や衛生思想の関心が高まるにつれ、伝染病が減少することが予想されるが、日本の社会構造の特殊性から下水道計画が不完全なものとなったため、大正期後半に病原駆除の記事が多く出てくることがわかる。(大正2年10月1日 報知)(大正4年6月19日 報知)の記事より

2. 2. 7 死 亡 率

死亡率に関する記事は計18とたいして多くないが、図1をみると、大正期中期、後期に、かっほぼ同じくらいの頻度で出ていることがわかる。ということは、死亡率のことは大正期を通じ、とくに大きな話題にこそならなかったが、大正期中期以降、ほぼ常に注目されていたことを示しているとみていいのではないか。

では、死亡率のどの側面が取上げられたか図7をみると、小児死亡が10で圧倒的に多いことがわかる。小児死亡の取上げられる時期は死亡率のそれとほぼ一致する。ということは、小児死亡のことがたえず注目されていたと考えられる。どのように小児死亡のことが取上げられたか、それを記事の内容をみることによってみていくと、

衛生思想が進んでも、小児死亡の記事は減じるどころか増加の傾向にある。これは生活上の慣習や養育上に問題があったことがわかる。(大正5年12月18日 萬)(大正6年9月3日 都)の記事より

3. 相互関連に関する分析

医師と看護婦は診療の上で親密な状態である必要があるが、大正期の医師と看護婦の関係を医師の項と看護婦の項をみることによってみていくと、

大正5年の東京の医師は6320人(大正15年12月30日 国民)であり、警視庁管下の看護婦は8221人、見習い看護婦は5136人(大正15年3月9日 時事)である。医師に比べて看護婦の数が少ないことがわかる。また、看護婦の多くは派出看護婦で病院看護婦は少なく、医師と看護婦の連携がうまく機能していなかったのではないかと考えられる。

大正期前期の済生会での巡回医としての女医の活躍にもあらわれる通り、婦女子の診療は女医の活躍の場であり、とくに小児分野に浸透していったと考えられるが、医師の項と死亡率の項をみることによってみていくと、

女医の小児分野での活躍が囑望されていたにもかかわらず、小児の死亡の減少には有効に働かなかった。それは女医が少ないことも理由のひとつであると考えられ、女医の増加傾向は女医が小児分野へ浸透していくきざしであると考えられる。

投薬として、初期の時代は高価な輸入医薬品を使用していたが、医療が人々に浸透していくに従い、安くて大量に手にはいるよい医薬品を使用するようになったと考えられるが、医師の項と薬の項をみることによってみていくと、

相変わらず、医師にとって投薬は大きな収入源であり、大正3年を境に国内の医薬品の製造に力をいれて安くて良い医薬品が大量に供給できるようになると、医師はそれを使用するようになったと考えられる。

4. 病院建築の変遷に関する考察

医師の数に対して看護婦が少なく、医師と看護婦の連携がうまく機能していなかった様子から、病院の看護婦の日常の勤務をする場所であるナースステーションが十分にその機能を果たしていなかったと考えられる。また、看護は付添いの人々によって一部肩代わりされていた。

産婆の増加によって、出産はますます産婆との関係を深め、そのためある面では女医は出産に関わることなく、得意の診療科目になりつつある小児の診療にあたることができた。女医の増加が小児科の分野の拡大をうながし、小児科をもつ病院が育ちつつあることがうかがえる。

医師の収入源として薬は大きな比重をしめていたことがわかった。輸入医薬品にかわって国内の医薬品が大量に安くはいるようになって、投薬するところである薬局は病院内で大きな位置をしめるようになったと考えられる。

5. 結 語

本稿で明らかになったことは次の通りである。

- 病院のナースステーションの機能は不完全なままで、付添人に看護の負担を強いた。
- 女医によって小児科の分野の拡大がうながされ、小児科の病院が育ちつつある環境となった。
- 薬局は病院内で大きな位置をしめるようになった。

大正期は、人々の衛生思想が高まり、医療が人々に浸透していき、医療に関心をもつようになった時期である。人々にとって遠くにそびえていた病院が身近に感じられるようになった。また、女性の活躍が医療に少なからぬ影響を及ぼし、医療の変革をもたらす遠因となっている。